



梅沢氏の経歴

- 1945 札幌市に生まれる
- 1969 北海道大学農学部
農業生物学科卒業
- 1973 平凡社からの仕事を受け、
初めて植物図鑑作成に携わる
- 1989 著作
『北海道夏山ガイド』シリーズの
初版が発行される
- 1990 国土計画が
夕張岳スキー場開発計画
を撤回
「雨竜沼湿原を愛する会」が
設立される
- 1997 北海道フラワーズンが
初開催される
- 1998 「北海道高山植物
盗掘防止ネットワーク」が
発足
- 2001 北海道希少野生動物の
保護に関する条例が施行される
- 2003 北海道道111号
静内中札内線の工事が中止される
- 2006 第14回
松下幸之助花の万博記念
奨励賞受賞
- 2009 『北海道の高山植物』を発表
- 2012 『北の花名山ガイド』を発表

02

梅沢 俊さん
写真家

消えた 五色のお花畑

うめざわ・しゅん 1945年、札幌市生まれ。北海道大学農学部卒。「ウメシユン」のニックネームで知られるネイチャーフォトの第一人者。著書に『北の花名山ガイド』（北海道新聞社）、『北海道の高山植物』（同）など。1989年刊行の『北海道夏山ガイド』シリーズ（同、共著）は改訂を重ねながら現在も読み継がれるロングセラー。

写真家への道

小学生のころは、昆虫少年でした。いつか昆虫学者になればなあと思っていたんです。でも大学に入ってみたら、アマチュアとプロ研究者はずいぶん違うことが分かりました。頭を使うのが苦手でしたので学者はやめて（笑）、もうちょっと体を使ってできる仕事はないかなと。

いちおう就職活動もしたんです。東京の出版社に願書を出して一次と二次試験にパスしました。次の面接試験のために上京する直前、「もし受かったとして、俺は東京でやっていけるんだろうか」って改めて悩んじゃったんです。

大学で打ち込んでいた山スキー部の活動と全然違う世界でしょう？ 当時、年間100日は山に入って、ハードな登山や撮影に明け暮れていました。けっきょく、面接試験をすっばかして日高に山行しちゃったんです（笑）、下級生を連れて。これが人生の岐路でしたね。

卒業後しばらくはアルバイトでしのぎました。札幌大通公園の売店にトウキビを運びこんだり、スーパーマーケットで働いたり。そしたら山スキー部のOBで厚生省^[1]に勤めて中部山岳国立公園^[2]のパークレンジャーになっていた先輩が、見かねてこんな仕事を紹介してくれました。田淵行男^[3]さんという著名な写真家の現地ガイドを頼みたい、というのです。

田淵先生は日本の山岳写真家や自然写真家の草分け的存在で、昆虫関係では『高山蝶』（1959年）、『ギフチョウ ヒメギフチョウ』（1974年）といった素晴らしい作品を残されています。その時は、『高山蝶』の舞台が北アルプス^[4]でしたので、次に北海道のチョウの生態を調べて撮影したいとお考えでした。そのアシスタントとして、あるていど虫に詳しくて道内の山を歩いて、たまたま今どこにも就職していない、若くてヒマな奴がいるということとで（笑）、ほくにお鉢が回ってきたのです。

[1]厚生省 1971年の環境庁発足まで、国立公園は厚生省が所管していた。厚生省は2001年の省庁再編で厚生労働省と名称変更。

[2]中部山岳国立公園 1934年指定。新潟・富山・長野・岐阜各県をまたぎ、面積は約17万ha。

[3]田淵行男さん 1905年～1989年。梅沢さんが撮影アシスタントを務めた『大雪の蝶』（朝日新聞社）は1978年刊行。

[4]北アルプス 飛騨山脈の別称。隣り合う木曾山脈、赤石山脈を合わせ「日本アルプス」と呼ぶ。

[5]新種 新たに発見された生物種。国際命名規約に基づいて記載され、学術雑誌などで発表される。梅沢さんが発見した新種にはリシリアザミ、ヒダカアザミ、マシケレイジンソウ、リシリハタザオがある。

[6]リシリアザミ 日本海に浮かぶ利尻島の固有種。1998年に新種として記載された。

[7]リシリハタザオ 利尻島の固有種。2007年初記載。

こうして田淵先生とふたりで大雪山や知床などに通い詰めることになりましたが、そうこうするうち、今度は平凡社から田淵先生に「植物図鑑を作りたい。北海道のチョウを取材中なら、ついでに道内産植物の撮影を頼みたい」と打診が入ります。でも田淵先生はチョウの幼虫探しに一所懸命で、「どうだい梅沢君、これやらないかい？」と、ほくにその仕事を回してくれました。

間もなく編集部から撮影依頼リストがどーんと届きました。やみくもに探しても見つからないので、まず北海道大学の植物学者に問い合わせ、1種ずつ標本を確認し、ラベルに記された採集地を手がかりに現地に向かうわけです。

図鑑作りの仕事は、美しい花だけでなく、地味なスゲやイネ科植物も対象になります。それ以前にもきれいな野花の写真家さんはおられたでしょうが、スゲまで撮っている人は北海道にはいませんでした。この最初の図鑑の仕事にはずいぶん時間がかかりましたが、何とかやり遂げることができ、それが他の出版社などからの撮影依頼にもつながって、やっと「写真で食べていけそうだな」と思えるようになりました。

ひろがる植物観察の裾野

それから約40年にわたって道内を中心に世界各地の植物たちの姿を撮影し続けてきました。頭の中には、そうですね、2000～3000種の名前は入っていると思いますけど、トシのせい最近はとっさに名前が出てこなくて(笑)。

でもこうやって特徴を覚えておくと、フィールドで実物を見たとき、たとえば「これまで北海道で未記載の種(品種)では？」というふうに、ピンとくるようになります。そういうものを専門家に鑑定してもらうと、やっぱり新種[5]だったり。リシリアザミ[6]やリシリハタザオ[7]はそういう経過で発見することができました。

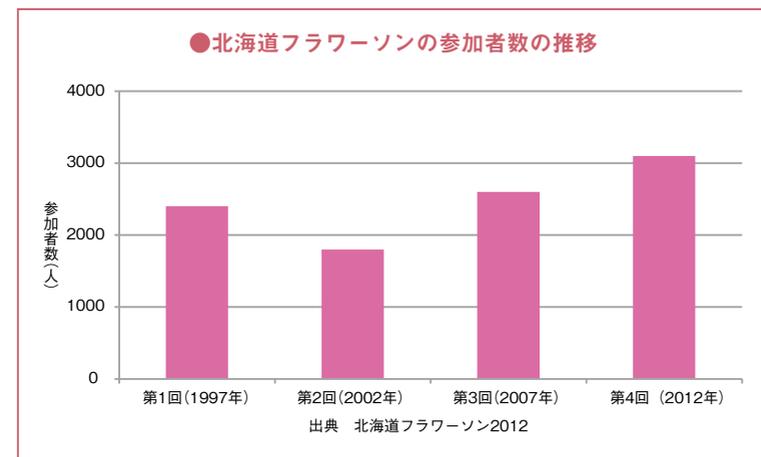
プロばかりではなく、各地にお住まいの植物ファンの人たちも、

ある程度そういう知識を持っていたら、「あれ、おかしいな？」って、思うことがけっこうあるんじゃないかと思います。最近も遠軽町在住のアマチュアによって、これまで北海道で未確認だったシダが新発見されたばかりです。元教員の方で、ライフワークとして地元の植物リストを作ろうとあちこち歩き回っているうちに「名前の分からないヘンなシダがあった」って(笑)。

新種がひとつ見つかったって、世の中が大きく変わるわけじゃありません。でも、非常に面白いことが分かる場合もあります。たとえば、北海道で最も本州に近いのは渡島半島ですよね。渡島半島には、東北地方とそっくりのブナ帯もあるし、植生も本州とつながりが深いと思込みがちです。ところが植物相を詳しく見ていくと意外や、むしろ日高地方に本州との共通種がみられる、という分布パターンのあることが分かってきたんです。これは生物地理学や保全生物学にとって重要な発見です。

こうした情報を各地から収集するという意味では、辻井達一先生の提唱でスタートした「北海道フラワーソン」[8]などの取り組みは、植物観察の裾野を拓げる効果も含め、非常に有益だと思います。そんな時、ほくの作った植物図鑑などが参加される野草ファンの方たちのお役に立っていたら、うれしいですね。

[8]北海道フラワーソン 1997年から5年ごとに開催。「フラワー・ウォッチング・マラソン」の略語で、チームごとに見つけた花の種数を競いながら各地のデータを集める一斉植生調査。



[9]イチゲイチヤクソウ

環境省RDBで絶滅危惧種に指定されている。

[10]エゾニガクサ 環境省RDBで絶滅危惧種に指定されている。

[11]外来種 もともとその地域にいなかったのに、人間の活動によって他の地域から入ってきた生物のこと。在来生態系に特に大きな影響を与えるものを侵略的外来種と呼ぶ。

[12]セイトカアワダチソウ 北米原産。外来生物法に基づく要注意外来生物。

[13]ニセアカシア ハリエンジュとも。北米原産。同上。

[14]オオハンゴンソウ 北米原産。外来生物法に基づく特定外来生物。

[15]セイヨウタンポポ 欧州原産。外来生物法に基づく要注意外来生物。

[16]シロツメクサ 欧州原産。クローバーのこと。

[17]雨竜沼湿原 雨竜町。暑寒別岳中腹の標高約900mに位置する。面積約100ha。

[18]雨竜沼湿原を愛する会 1990年設立。

お花畑の危機

さて、こうやって長く見続けていると、北海道の植物相の変化がとてもよく分かります。

先ほどの、1970年代にほくが初めて取り組んだ平凡社の図鑑に、イチゲイチヤクソウ^[9]の写真があります。苦労の末に自生地を見つけたのですが、ほく自身は写りが不満だったので、図鑑刊行後に再撮影に向かいました。ところが一帯が皆伐されていて、以降現在まで天然群落は二度と見つけられずにいます。

エゾニガクサ^[10]という植物は、古い標本が北海道大学に収蔵され、当時は札幌でもふつうに見られたらしいのですが、現在は非常に数が減り、いつも探し回っているほくですらほとんど見つかりません。やはり林道建設など、開発の影響を受けている場合が多いようです。

人の生活圏では、外来種^[11]の脅威も肌で感じます。セイトカアワダチソウ^[12]、ニセアカシア^[13]、オオハンゴンソウ^[14]、セイヨウタンポポ^[15]、シロツメクサ^[16]……。こうした外来種に、もともと在来種が占めていたエリアが侵略されているのです。

外来種対策では、各地のNGOが頼もしい活動を続けています。たとえば雨竜沼湿原^[17]の登山道には、特定外来種オオハンゴンソウの黄色い花がまったくありません。地元の「雨竜沼湿原を愛する会^[18]」のボランティアたちが、引き抜き作業を続けているからです。皮肉なことですが、山道の脇に黄色い花が咲き誇っているのがすっかり北海道の夏の風景になってしまっていて、それが一本もない雨竜沼を訪ねるたび、「これが本来の北海道の姿だったんだよね」と思い出させられます。

ただ、毎年の防除活動で何とか侵入を防げるオオハンゴンソウは、まだマシなんです。それに比べると、ニセアカシアはやっかいです。地上部を切除しても、地中に根が残っていたら、またすぐに繁茂してしまいますから。

外来種問題はかくも深刻で、このまま放っておいたら北海道の低山から在来種がなくなってしまうのでは、と心配になるほどです。

かたや、人里から離れた高山帯でも大きな変化が起きています。大雪山国立公園^[19]を例にとると、まず湿原の乾燥化が進んでいます。大雪山系屈指のお花畑といわれた五色ヶ原^[20]は、かつてはホソバウルップソウ^[21]などの湿生植物がバァーッと大群落を形成していました。しかし近年は乾燥化によってササが侵入し、湿生植物は明らかに減少しています。『北海道夏山ガイド』（北海道新聞社、1989年初版）の中の「五色岳」のページに、ほくはチシマノキンバイソウの大群落を撮影した作品を大きく載せているんですけど、ここ何年かの改訂版では「今はこんなふうには見られませんか」と断り書きを入れています。鮮やかなイエローをしたチシマノキンバイソウの花は、今ではポツンポツンと咲いているだけで、これでは「五色ヶ原」とはいえません。一面ササ原の「緑ヶ原」になってしまったのです。

乾燥化と並んで深刻なのが、エゾシカによる食害です。エゾシカは林縁性動物とされ、これまで高山帯には分布していませんでした。ところが1980年代から1990年代にかけて、はじめ道東で、続いて道北・道央・道南でエゾシカの個体数が爆発的に増加し始め、10年くらい前からは、これまで姿を見せたことのない高山帯にもエゾシカたちが進出してきたのです。

大雪山の五色ヶ原ではキンバイソウ属が食べられていますし、夕張山系ではエゾノシモツケソウが被害に遭っています。夕張岳^[22]のお花畑も、ほくが撮った昔のきれいな写真が残っているのですが、現在ではまったく見られなくなってしまいました。

高山植物はもともと、低温・貧栄養・強風・雪氷など過酷な条件下で、ぎりぎり群落を保っているという場合が多いのです。そこへ乾燥化や食害などの新たなストレスが加わると、もはや群落を維持できない状況に陥ってしまうケースが珍しくありません。

たとえば、日高山脈のアポイ岳^[23]や幌満岳^[24]の特産種ヒダカ

[19]大雪山国立公園

1934年指定。日本最大の国立公園で、面積は約23万ha。

[20]五色ヶ原 五色岳（標高1868m）の緩斜面に広がる広大なお花畑。開花期には白（エゾノハクサンイチゲ）、黄（チシマノキンバイソウ）、ピンク（エゾゴザクラ）の色の帯が浮かび上がって見えたという。

[21]ホソバウルップソウ 環境省RDBで絶滅危惧種に指定されている。

[22]夕張岳 標高1668m。「花の名山」として知られ、高山植物群落と蛇紋岩メランジュ帯は国の天然記念物。

[23]アポイ岳 標高811m。高山植物帯は国の特別天然記念物。日高山脈襟裳国定公園の特別保護区。ヒダカソウ生育地は北海道希少野生動植物の保護に関する条例^[1]に基づく保護区に指定され、2004年から立ち入り禁止措置が続いている。

[24]幌満岳 標高1188m。ヒダカソウ生育地は「北海道希少野生動植物の保護に関する条例^[1]」に基づく保護区に指定され、2004年から立ち入り禁止措置が続いている。



1990.7.16



2007.7.19

大雪山・五色ヶ原の植生の変化
(写真提供 工藤岳氏・北海道大学大学院環境科学研究院)

[25]ヒダカソウ 北海道固有種。環境省RDB絶滅危惧種。

ソウ[25]がそうです。きっかけは人間の盗掘でしたが、盗掘が止んでもどんどん群落が縮小して、今や種の維持すら危うい状態です。今年（2012年）夏の調査では、両方の山を合わせて開花数が20でした。花同士がお互いに遠く離れているから、自然状態では交配すらままならないでしょう。

生物多様性をひとことで説明するのは難しいんですが、ようするにこの世界はいろんな生物同士の相互関係で成り立っているんだってということ。エゾシカがこれほど激増している大きな要因の

ひとつは、エゾオオカミ[26]を減ぼしてしまったことでしょう。野草1種、動物1種を失ってしまうと、すぐにはその影響は分からないかも知れませんが、後でものすごい問題を引き起こしてしまう可能性があるのです。

[26]エゾオオカミ 北海道固有亜種。明治期に害獣として毒殺駆除が奨励され、19世紀末以降捕獲記録はない。環境省RDB絶滅種。

[27]北海道大学植物園 1886年開設。札幌市中央区。

[28]北海道大学総合博物館 2001年開設。札幌市北区。



●北海道レッドデータブック掲載種数

分類群	絶滅種	野生絶滅種	絶滅危機種	絶滅危惧種	絶滅危急種	希少種	地域個体群	留意種	合計
植物	3	0	35	47	109	316	0	1	511
哺乳類	2	0	1	0	4	15	4	1	27
鳥類	2	0	7	7	16	39	0	1	72
両生類・爬虫類	0	0	0	1	1	0	4	1	7
魚類	1	0	3	1	3	14	8	7	37
昆虫	2	0	2	6	11	389	1	19	430

出典 北海道レッドデータブック(北海道)

自然史博物館をつくろう

そうした影響の兆候をとらえるには、やっぱりエリアごとの長期的な自然観察が欠かせません。この意味でも、道内各地で地元野草ファンの方たちの役割は重要なのです。

ただ残念なのは、そうした各地の情報を収集整理するセンターが北海道にないことです。自然史博物館もデータベース機関もありません。札幌に北海道大学の植物園[27]や総合博物館[28]がある

[29]ヒマラヤ山脈

「世界の屋根」と呼ばれ、地球上で最も標高の高い地域。8848mのエベレストをはじめ、8000m級のピークが14座ある。

せいでしょうか、建設がずっと後回しにされています。

地方の人たちがウオッチングを続けてせっかく情報を集めても、それを適切に蓄積する受け皿がないのです。もし情報センターがあれば、地元で正体不明な植物が見つかったりした時、「これは何でしょう？」ってすぐ照会できるでしょうが、今はそういう問い合わせがはくのところに来ています（笑）。

さきほど、東北地方と日高地方の植物相に共通点があるというお話をしましたが、北海道外と道内をきちんと比較するにも、データの国際的な利用に応えられる施設があったら、と強く感じます。

最近、取材のためにブータン王国を訪ねてきました。ネパールなどと同じヒマラヤ山脈^[29]に接する国のひとつです。原生林がすごく残っていて、自然保護政策がきちんとしている国だな、という印象を受けました。ただ高山帯に行くと、人々は基本的にヤクなどの家畜を放牧しながら暮らしています。そんな放牧家畜が食べ残した植物がお花畑を形成しているんです。

つまりヒマラヤでいうお花畑とは、家畜の食べ残しのこと。だからお花畑と呼んではいますが、あたりは家畜のフンだらけなんです（笑）。ところが北海道の高山帯のお花畑は違います。ヒマラヤよりむしろ大雪山こそ「全くの手つかずの自然」なのです。

こんな手つかずの高山帯の風景は、ヨーロッパはもちろん、中国の奥地にももう残っていません。北海道の大雪山だけが違う。こんな環境は、おそらくユーラシアでは唯一でしょう。大雪山がいかにすごいところか、ヒマラヤまで行って改めて気づいたので。花の種類は少ないし、今はエゾシカがちょっと食べているけれど、これこそが本当の自然で、ちゃんと守らないとダメだと思ひ知りました。

こんなふうに、自分たちの自然環境をほかの地域と比べ合うことは非常に意義があります。そんな時にやっぱり、ぜひ北海道にちゃんとした自然史博物館が欲しいなと思いますね。

北海道の自然保護に対する道民の意識は、行政も含めて、すで

にじゅうぶん高いところまでできているんです。かつて、大雪縦貫道^[30]というのが着工されたことがありました。反対運動が起きて中止されましたが、現在なら開発行政がそんな計画を立てること自体がありえないでしょう。夕張岳のスキー場開発^[31]、日高横断道建設^[32]なども同じです。もちろんこの先はもっと、行政官庁や政治のトップに立つ人たちに環境問題を勉強してほしいし、官僚の中に必ず環境問題の専門教育を受けた人を一定以上採用する、といった決まりがあってもいいかも知れません。

ただ勉強といっても、研究室に籠もってばかりの勉強はお勧めしませんよ。まずフィールドに出ることから始めましょう。山登りをして、花を見て、楽しいと感ずることが一番。山から帰ってきた後の、夜のビールも美味しいですし（笑）。そうでなきゃ何十年も長続きはしませんからね。

(2012年8月20日取材)

●自然分野を含む主な国・都道府県・政令指定都市立博物館



作成 編集委員会作成

[30]大雪縦貫道 道路の正式名は「北海道道718号忠別清水線」。1958年着工、1973年工事凍結。

[31]夕張岳スキー場開発計画 1988年、国土計画（後にコクドと改称。2006年解散）がプランを公表。激しい反対運動が起き、同社は1990年、計画を撤回した。

[32]日高横断道 正式名は「北海道道111号静内中札内線」。1984年着工、2003年中止。